

1 パラグラフの構造

1.1 役割

パラグラフは文書（ドキュメント）の最も基本的なパーツである。文意の転換点で改行した結果として「できたもの」ではない。ドキュメントを構成する段階で用意しておくべきものであり、整然と構成された文書であれば、最初からパラグラフの数と個々の役割が決まっている。ドキュメントの構造のなかでは、パラグラフの集合が「項」、項の集合が「節」、そして節の集合が「章」である。小論文であれば、パラグラフ自体が章そのものだ。

一つのパラグラフには一つの役割、すなわち主張が存在する。パラグラフの担う役割の展開が、論の骨格を構成することになる。したがって、パラグラフの配置順序もドキュメントの構成段階で決めておかねばならない。言い換えるなら、ドキュメントの構成を考えるということは、必要なパラグラフの役割と配置を決めることだ。

レイアウトの都合により、ひとつのパラグラフが複数に分割されることがある。新聞の社説ではしばしば見られる。そのような文書を読むときは、読者側で本来のパラグラフを再構成しなければならない。むしろ、本来のパラグラフを分割するというのは、あくまでも視覚効果を優先させた結果だ。パラグラフはあくまでも論を構成する最小単位なので、論旨を優先するかぎり分割はありえない。

構成を工夫することにより、パラグラフの大きさを一定に保つことは可能である。むしろ、細かなところまで構成が検討されていれば、結果的にパラグラフの大きさはほぼ一定に保たれるはずだ。執筆時に大きすぎるパラグラフができてしまったときは、構成を微修正することによって、パラグラフの大きさを制御できるのである。レイアウトの都合で分割してしまうと、論理にゆらぎが生じてしまうが、構成を微修正した結果であれば、論理自体をゆがめることはない。

パラグラフを意識するということは、構成を意識することとイコールである。レポートなどを執筆するときには、いきなり文を書くのではなく、まずは構成を練る。必要なパラグラフが判明するまで構成を練る。「はじめにパラグラフありき」ということを忘れてはならない。

1.2 センテンスの種類

パラグラフは3種類の文（センテンス）で形成される。各種類のセンテンスには固有の役割があり、一つのセンテンスが複数の役割を担うことはできない。ゆえに、一つのパラグラフは最低でも3つのセンテンスを持つことになる。

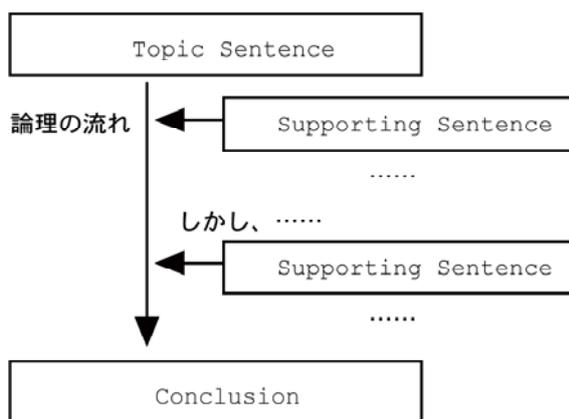
各パラグラフには、そこでの主張を集約した「トピック・センテンス (TS)」という文が存在する。TSは「主題文」とか「題目文」ともいわれる。TSはパラグラフの中核であり、他のセンテンスはすべてTSに付随する位置づけとならねばならない。ドキュメントの構成を練り終え、いざ執筆に取り組むときは、TSをひととおり書き通すのが原則である。TSさえ明確に書ければ、パラグラフの残りの文を用意することは難しくない。

TSは原則としてパラグラフの先頭に置かれる。論旨を明確にするためには、一般に「重要なことを先に示す」ことが原則である。TSがパラグラフの中核であり、主張を集約している以上、TSを先頭に配置するのは当然のことである。表現上の意図によってTSをパラグラフの先頭に置かないことはある。しかしそのためには、あえて先頭に置かないことの明確な理由が必要だ。明確で論理的なドキュメントの執筆を目的とするなら、TSはパラグラフの先頭にならず置くようにすべきだ。

パラグラフの最後に置かれ、意味的にTSと対をなす文が「コンクルージョン (C)」である。Cはパラグラフにおける結論的な内容を示す。パラグラフ内での論理の流れは、TSからCに向かって論旨が

展開するという形式になる。むろん、TSがパラグラフの主張を集約している以上、TSとCの内容は一致していなければならない。一般には、TSのあとにさまざまな視点を述べる文を並べることになるので、最後にTSの内容を再確認する位置づけでCを置く、と考えればよい。

TSとCの間に配され、TSの詳細を説明する文が「サポーター・センテンス(SS)」である。これは「捕捉文」とか「説明文」と呼ばれることもある。TSとCがそれぞれ一つのパラグラフのなかで一つだけであるのに対し、SSの数にはとくに制限はない。文意としてTSを否定的に論じるSSがあってもかまわないが、TSに対する肯定的な説明文と否定的な説明文とは、それぞれをひとまとめにするのが原則である。重要なことは、パラグラフの主題をTSに、説明をSSに分けて述べることである。



以上の説明からわかるとおり、パラグラフはドキュメントの基本パーツであるが、その中心がTSという文である。ドキュメントを具体的に作成するときは、まず最初にTSを書くことを優先させる。それからSSによって十分な説明をほどこし、最後にCで締めるという順序で執筆することを心がけよう。テキストは冒頭から順々に文を書く必要はない。TSを中心に組み立てていけばいいのである。

1.3 パラグラフ分析による要約

パラグラフとTSを中心にドキュメントを組み立てる方法を逆に用いれば、ドキュメントを合理的に読解できることになる。ドキュメントの基本パーツがパラグラフであることから、ドキュメントの内容はパラグラフ単位で抽出できるはずだ。TSがパラグラフの中心であり、一つのパラグラフに一つのTSがある以上、個々のパラグラフからTSを取り出すことで、ドキュメントの中核的な内容を把握できる。読解の基本は要約だが、要約の出発点はTSを取り出す作業にほかならない。

厳密に構成されたドキュメントは、各パラグラフの最初の文を機械的に抜き出すだけで要約できあがる。実際にはTSをパラグラフの冒頭に置かない場合もあるので、つねに単純作業だけで要約できるわけではない。しかし、自身がドキュメントを作成するときは、機械的に要約可能な構成に仕上げたい。簡単に要約できるドキュメントほど、論旨は明快に伝わるはずである。

別な言い方をすれば、ドキュメントを作成するときは、目次、概要、本文の順番で書くのが鉄則だ。目次とはすなわち構成そのものである。そして本文を要約した結果が概要なのではなく、概要にSSを捕捉した結果が本文である。

1.4 演習の視点

「最初にトピック・センテンスを考える」ことを習得するためには、与えられたテーマを4つの文で論じる練習を重ねるとよい。論の基本構成は4パートから成るので（詳細は次回に解説する）、この練習はつまり、4つのトピック・センテンスを作ることが目的である。それぞれの課題に対し、現状を集約したセンテンス、問題点を指摘するセンテンス、解決策・議論の方向性などを提案するセンテンス、自分の意見を示すセンテンスを考えてみよう。もちろん4つの文は論理的に意味がつながるように書かなければならない。

では、次の課題1～8に取り組んでみよう。いずれも時事的なテーマなので、わからない事柄はインターネットの新聞社系 web に掲載されたニュースなどを参考にすること。

(この回おわり)

【演習問題 1】

- 課題1：バイオエタノールの普及を促進すべきか否かを論ぜよ。
- 課題2：サブプライムローンが世界経済に及ぼす影響を論ぜよ。
- 課題3：毒餃子問題をめぐるマスコミ報道の姿勢を論ぜよ。
- 課題4：キャラクター「せんとくん」を巡る問題点を論ぜよ。
- 課題5：チベット問題をめぐる日本政府の姿勢を評せよ。
- 課題6：ガソリンの暫定税率をめぐる自民党・民主党の姿勢を評せよ。
- 課題7：橋下府知事の財政政策をめぐる姿勢を評せよ。
- 課題8：来年から始まる裁判員制度の問題点を論ぜよ。